

印山越王陵

岡田章一

1 はじめに

印山越王陵（報告書本文では印山大墓）は中国浙江省紹興市の西南約13kmに位置する印山の山頂にあり、春秋時代後期（前5世紀）の越王勾踐（?～前465年）の父允常（?～前496年）の「木客大墓」と考えられている。発掘調査は1996年から1998年にかけて行われ、調査の結果、印山王陵は細長い「甲」字形の深い堅穴岩坑墓で、墓上には高く大きい封土があり、外側の四周には防御・保護施設である隍壕（周壕）を持つことが明らかになった。

報告書⁽¹⁾は浙江省文物考古研究所及び紹興県文物保護管理所によって2002年3月に刊行された。報告書は6章16節で構成され、その内容は以下の通りである。

序

第1章 概況

第1節 歴史的沿革と地理的環境

第2節 発見と発掘の経過

第2章 墓葬形制

第1節 隍壕

第2節 封土

第3節 墓道と墓坑

第4節 甬道と墓室

第5節 葬具

第3章 出土遺物

第4章 墓葬年代と墓主の身分

第1節 墓葬年代

第2節 墓主の身分

第5章 発掘の主要な意義

第1節 考古学研究上の意義

第2節 歴史学研究上の意義

第6章 いくつかの問題の探求

第1節 王陵の盗掘時期に関して

第2節 空墓或いは移転した可能性の有無

第3節 王陵の埋葬過程の分析

第4節 王陵の埋葬制度の分析

第5節 陪葬墓の有無

当館の和田晴吾館長は印山王陵が中国では珍しく周壕（方形）を持ち、ごく初期の「室」（合掌式木室）に「開かれた棺（小口板の無い割竹形木棺）」を納める巨大な墳丘墓であることに注目され、一昨年、報告書の翻訳を筆者に依頼された。小稿はその訳稿をもとにした報告書の概要紹介である。

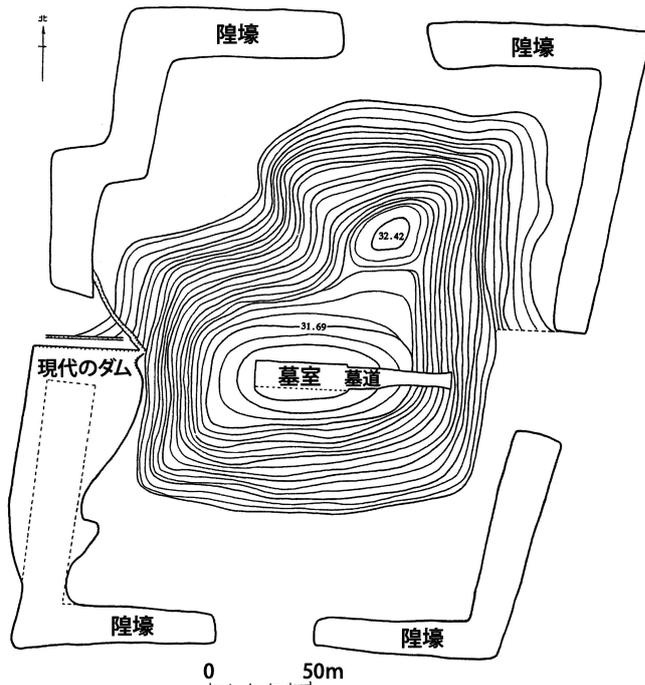
紙数の制約から、小稿では報告書の主要部分である特殊な墓室構造と日本の古墳の周壕と共通性を有すると考えられる隍壕を中心に報告書の概要を紹介する⁽²⁾。

2 墓葬の形と制度

(1) 隍壕

隍壕は王陵の麓の四周にあり、全てが人工的に掘られた1種の防御・保護施設であり王陵の重要な構成要素である。隍壕全体の平面範囲は南北320m、東西265mの南北に向く長方形を呈し、王陵をその中に囲んでいる。

四面の隍壕の総延長は888mあり、それぞれの隍壕の間には4面对称の通道がある。隍壕の4つの角



第1図 印山越王陵 隍壕配置図

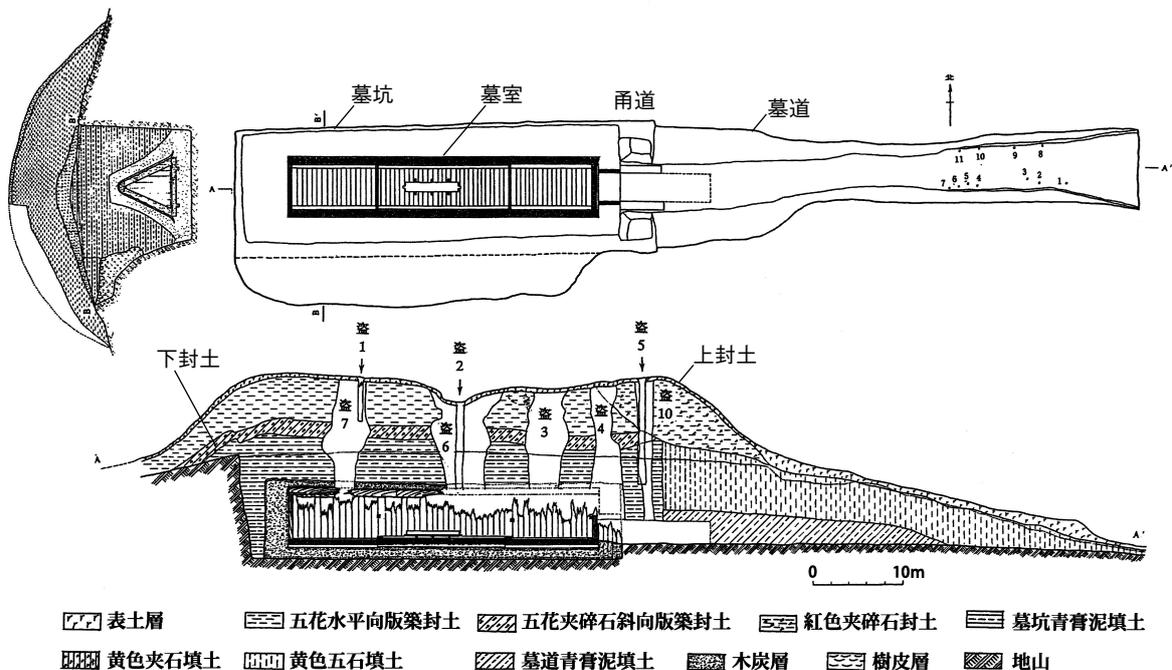
は曲尺形で、角度はほぼ直角である。隍壕の幅は16~29m、深さは2.1~2.7mである。

隍壕の東辺長は266m、中間の通道の幅は60m。南辺長は190m、中間の通道の幅は50m。西辺長は287m、中間の通道の幅は48m。北辺長は218m、中間の通道の幅は37mである。隍壕全体の掘削土量は約40,000m³で、隍壕を掘って出た土の一部は墓上の封土に用いられている。隍壕は大墓の重要な組成部分であり、それは一方では陵园の平面範囲を限定し、明確な陵园の配置を形成すると同時に大墓に対して城市の壕と同様にそれを囲護する作用を果たしている。

(2) 封土

大墓は印山の頂に築かれており、墓上には高く大きい封土が版築で築かれている。

封土の全体の形は基本的には東西に向く長方形の覆斗状（切頭角錐形）を呈する。封土の底の東西長は72m、南北の幅は36m、中心の最高所は9.8mである。封土は五花土（攪乱土と自然堆積土が混じった埋土）を用いて版築されており、墓坑全体と墓坑につながる墓道を覆っている。内部の構造と版築土層の分布の観察から、上封土、下封土と、墓道に繋がる部分の封土に明確に分類できる。



第2図 墓坑平・断面図

下封土は埋葬施設を覆うために最初に版築された部分で、その封築範囲は坑口にしっかりとかかっている。下封土の版築土層は中間から四周に向かって斜行し、版築土層は徐々に薄くなり、全体の形態は東西に長い長円形の隆起状を呈する。土中には大量の碎石が混じり、挖岩坑（岩を穿って造った坑）を掘って得られた土を適当に粉碎した後、版築したと考えられる。版築は極めて堅緻で版築層は容易に剥離する。版築層は等しく分布し、厚さは同じで7～8cmである。

上封土は下封土の基礎の上に四周に向かって拡大し、上に向かって高さを増して行く。その主な特徴は各版築層が等しく平らに分布することである。四面の版築層は全て水平で、下封土の版築層の傾斜分布とは明らかに違っている。版築は全て五花土を用いて丁寧に行われ、版築層は堅く剥がれやすい。分析の結果、上封土の主な材料は隍壕を掘った土である可能性が高い。

墓坑と墓道が繋がる場所の封土は封土の東頭の部分にあたる。これは最後に築かれた封土であり、挖岩坑と墓道から得られた碎石土を利用して築かれており、土中には大量の碎石が混じり色は紅に偏る。この部分の築成の造り方は下封土、上封土より雑で、版築は緊密ではなく明らかにしまりが悪い。

各方面の発掘結果からの分析によると、埋葬の過程は建造された墓坑と墓室の上にもまず填土（埋土）と封土を完成させ、埋葬する時は墓道から甬道（羨道）を通して墓室に入る。埋葬した後、再び甬道と墓道を埋めすでに出来上がっている上封土を東に向かって拡張し、甬道と墓道を封土で蓋をして最終的に完全な封土堆を造ったと考えられる。

(3) 墓道

墓道は墓坑の東壁の真ん中にある。墓坑と繋がっていて両者を合わせると平面は「甲」字形を呈する。東西方向に細長く延び、岩を穿って作られている。全長54m、開口部の幅は6.5～14m、底幅は3.4～8.7mである。墓道は両端が広く中間が狭い。

(4) 墓坑

墓坑は岩を穿って造られ、長方形の堅穴深坑で規模は巨大で石台（石壇）は用いない（階段状にはなっていない）。元来の坑口の幅は14m前後、坑の深さは12mに達し、坑底は内側に向かって窄まる。長さは40m、幅は12m前後、坑底は加工され平滑でほぼ水平に削平されている。坑底と墓道底面の高さの差は1.6mである。

地下水の浸食と雨水の浸透を防ぎ、墓室を保護し、木製構造（の墓室）の腐乱を防止する目的で、大墓の填築（大墓の埋土は分層版築され、しっかりと搗き固めてある）は極めて緻密に念入りに科学的に行われている。墓坑内の填土（埋土）は南壁が碎石を含んだ黄土による填築であるのを除けばそれ以外の坑内の範囲の上部は全て青色粘土で填築され、填築の厚さは6～8m、中心部は坑口から1m前後出ており、縁辺部は坑口にしっかりと嵌めこまれている。表面全体の形状は東西に向き、中間は隆起して船の帆状になっている。青色粘土にはかなり強い防水作用があり、墓室の防水、隔水、密閉に一定の作用を果たしていたと考えられる。

青色粘土の下には吸水を防ぐために木炭が敷き詰められていた。木炭は木製構造の墓室全体を覆っており、一つ一つは細かく砕かれているが墓坑底部に敷かれたものの中には少なからず粒の大きい木炭が混じっていた。

墓室が両面斜行状を呈しているのは墓室外側を護る炭層の堆積も両面斜行が相応しいからである。当時はまず墓坑の底面全体に木炭を敷き詰めた後、墓室を建築したことが分かった。墓室頂部及び両

側の木炭と墓室底部に敷き詰められた木炭とは一連のものであり、木製構造の墓室の裏にあたる。木炭には比較的強い吸水性と防湿性があり墓室の外側と墓坑の底部の木炭は填土（埋土）と岩壁からしみ出た水分を少量吸収することが出来た。

木炭層下の墓室の外側は140層前後の樹皮で保護され、厚さ20cm前後の樹皮保護層を形成し、墓室を嚴重に保護しさらには墓室の密封の程度を向上させている。

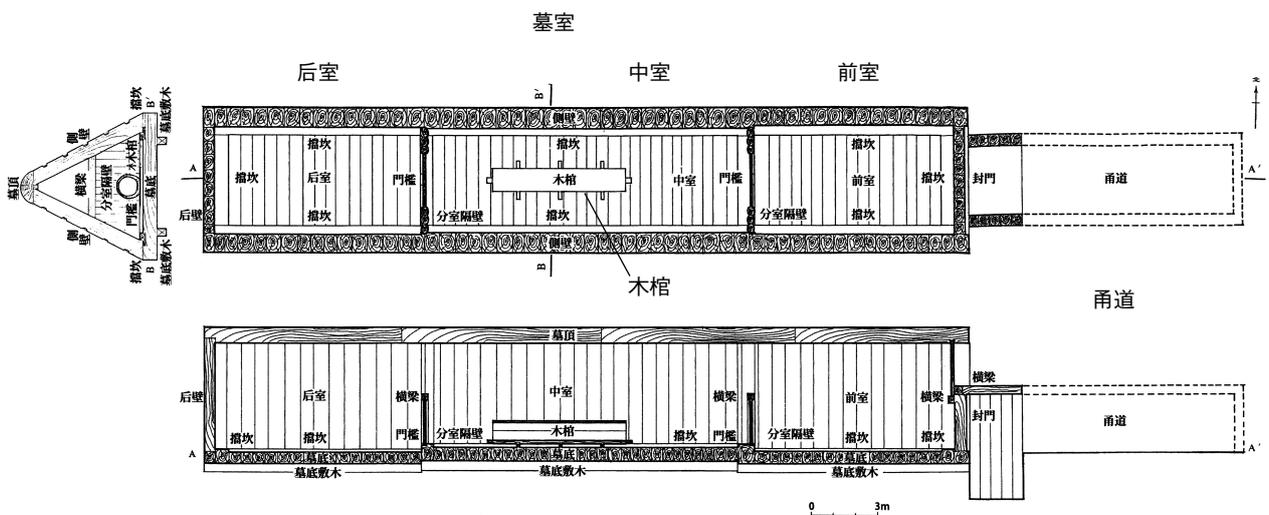
斜面上に蓋をする樹皮保護層は墓室の外からしみ出てくる水が斜上の樹皮の表面を墓室の両側に向かって流れ、水分が内側の木製構造（の墓室）に影響しないようにし檀木（黒檀、紫檀など堅硬質の高級木材）の間の隙間から墓室内に入ってくるのを防ぐのに有利に作用し、その効果は屋根の斜面に葺かれた瓦に符合する。

(5) 甬道

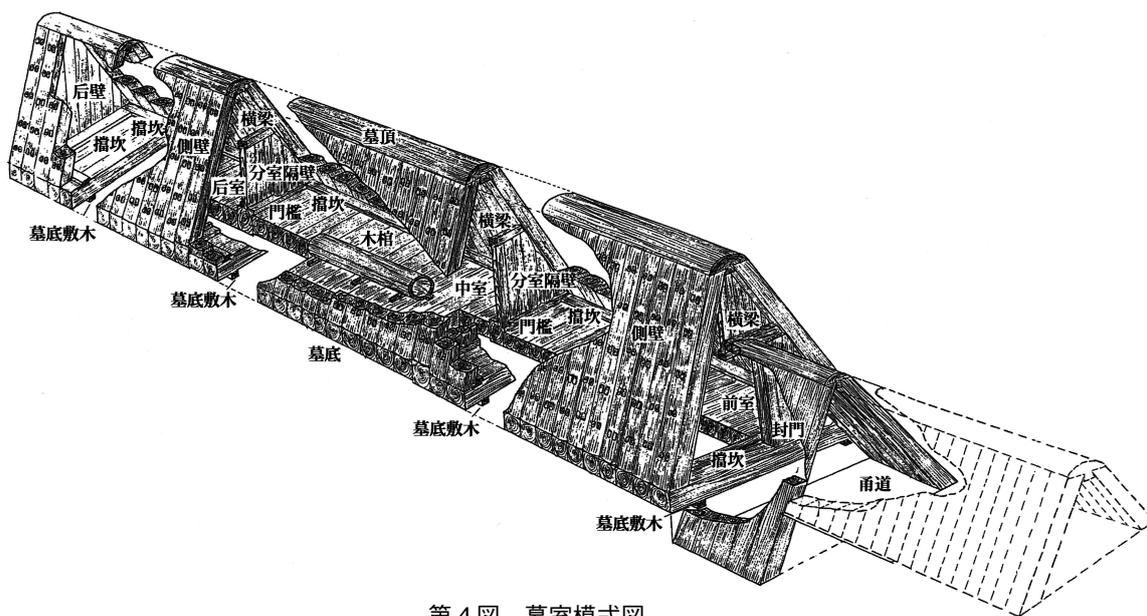
甬道（羨道）の平面は東西方向に向く長方形を呈し、墓室東端の真ん中であって、それと墓室とで全体では「甲」字形の平面形状を呈する。甬道の一部は墓坑内にあるが大部分は延伸して墓道内にある。甬道は正方形に加工された檀木を用いて構成されており、その形と構造は墓室と相似形をなす。横断面は三角形の「人」字形斜行状で、南北両側は斜行して互いに支え合う斜め支柱である。違ってゐるのは甬道の底部では木杭を敷き詰めた底が見つかっていない事で、その高さと空間は墓室より小さい。甬道内の頂端は岩坑の底面からは4.7m上にあり、底部の活動炭面からは2.6m上にあって、甬道の外頂端は墓室の外頂端より2.7m低い。

(6) 墓室

墓室は墓坑の真ん中に作られていて、平面は墓坑の向きと一致する東西方向の長方形である。墓室の底部の南北両側辺は墓坑の南北両壁から3m近く、西端は墓坑の西壁から2.95m離れ、東端は墓坑の東壁へ2.5mに至る。墓室の東西長は34.8m、墓室の内長は33.4m、幅は4.78~4.98m、墓室の内底の平均面積は160㎡余りである。墓室全体は巨大な檀木の本組みで作られており、その中の墓室の南北両側の壁の2列のしっかりと配列された縦向きの頂端は相互に支えあって作られている。横断面は二



第3図 墓室平・断面図



第4図 墓室模式図

等辺三角形の「人」字形斜行状を呈する長方形の墓室となっている。墓室の頂面の背骨はすなわち互いに支えあう斜行支柱の頂端である。太くて大きい半円柱の木材を用いて上から重みを加えている。墓室全体の高さは5.5mである。墓室は前、中、後の3室に分かれ、各室の間は門檻（敷居）、門梁と門板で隔て、中室に巨大な独木棺を安置する。前室長9.15m、幅4.98m、中室長13.85m、幅4.78m、后室長9.1m、幅4.88mである。3室の床面には高低差があり、中室が最も高く、前・后室と比べてそれぞれ0.25、0.20m高い。3室の頂部の高さは一致する。前・中・后室の室内の復元高度は4.95、4.7と4.9mである。墓室の南北両側壁の斜行支柱及び封門と后壁立木の内側面には墓底から高く突き出た擋坎（とうかん・水などを遮る棧）が設けてある。

墓を造るのに使う檀木は巨大であり、底木の長さは6.7m、側面は斜行して斜行支柱の長さは5.9mある。檀木の切断面は幅が広く、厚さは0.5～0.8mの間にある。加工は極めて平滑で、稜角は規則正しい。檀木の排列は緊密で多くは漆塗である。頂木と斜行支柱はしっかりと留められており、全体の設計は緊密で巧妙である。保存の比較的良好側壁内側と室内の地面は平滑で、漆面は新しいもののように光り輝き、今でも檀木の間隙間を見出しにくい。このことから当時の墓室の構築の厳密性と巧妙さが分かり、墓室はもともと風を通さなかったと考えられる。

墓室を造る過程はまず岩坑の底部に厚さ1.3m近くにまで木炭を敷き詰め、その上に檀木を2本東西方向に敷き、平面には南北対称の檀木を敷き、それは墓室底に敷いた全体の平面性を保証し、鉄道の枕木に似ている。2本の東西向きの敷木を敷き終えた後、木炭の敷高と2本の敷木全体を平らにして、墓坑底部の木炭の厚さを1.65mにする。その後、2本の敷木の上に大きい正方形の檀木を南北方向に敷き、平たい墓室の底面を形成する。同時に四周の擋坎と各室の門檻（敷居）を設置する。墓室底面の南北両側はそれぞれ檀木を緊密に敷き並べ互いに斜行して、墓室南北の両側壁を形成し、断面が二等辺三角形の「人」字形斜行を呈する墓室を構成する。

墓室の後端（最西端）は直立する檀木を用いて墓室の後壁を構成する。最後に墓室の頂部に半円形の大きな柱を立てて部屋の大黒柱のようにする。墓室の前端の封門の壁は埋葬が完成した後、再び大

きな直立する檀木を用いて封閉する。

「人」字形で斜行する墓室の両側の斜面及び中央の大黒柱と墓室の外に填築された1mの層の間には1層の厚さが0.2mの樹皮が敷かれていて、細かい剥離が120層にも及んでいる。斜状に覆う樹皮層は滲み出た水が斜状の樹皮の表面に沿って墓室の外側へ流れ出るのに有利となっていて、水分が内側の木の構造物に影響を与えないようにし、更には檀木の間隙に沿って墓室内に滲み入らないようにしている。

その作用は斜めに葺かれた今日の瓦に似ている。墓室の底の炭は緊密に搗き固められる。墓坑の底部の木炭は一般には比較的大きく、墓室に近接する部分の木炭は細かく碎かれるのは上部の炭の搗き固めが大きいことと関連がある。

墓室の両側及び頂部を覆う1m近くの厚さの木炭もまたしっかりと搗き固められており、その粒は細かく碎かれている。木炭の作用は頂部の封土、填築及び坑壁と坑底の岩層中から滲み出た水分を吸収し、それは墓坑内に大量に充填された青色粘土及び炭層と墓室の間の樹皮層と一緒に墓室の外側の防潮施設を形成している。

(7) 独木棺



第5図 独木棺の出土状況

棺は巨大な杉の丸太を半截してくり抜いて作られており、その半分で棺身を、別の半分で棺蓋を作っている。ひどく腐敗し厚さも非常に薄くなっているが、現状の大きさは長さ6.05m、幅1.12m、厚さは0.13mを測る。中室の中部のやや後ろ寄りに東西方向を向いて安置され、内外面とも黒漆が塗られていた。棺身の底部の両端の真ん中には棺体から突出した棺を運ぶ際に縄を掛けるための出柄がある。棺の両端には擋板（小口板）は見られず、擋板の腐乱した痕跡も見つかっていない。また、棺内からはなんらの副葬品、有機質の腐乱し

た痕跡、さらには被葬者の骨の痕跡すら見つかっていない。

3 考察

印山王陵の特徴は以下の5点にまとめられる。

- 1 広く長い墓道をもつ豎穴深坑
- 2 形制が独特の墓室と巨大な独木棺
- 3 大量の木炭と青色粘土の填築
- 4 墓上に築かれた巨大な封土
- 5 墓地の四周に掘られ防御と保護に使われた隍壕

以上の印山越王陵の埋葬制度を構成する5つの主要要素を浙江地区での以前の考古資料と比較すると一つの興味深い事実が発見された。

すなわち、それらはその一部が越地域の伝統的葬制と同じかあるいは似ていることを除くと、その大部分は非越文化中の伝統要素であるということである。簡単に分析すると以下の通りである。

(1) 墓葬形制

過去の大量の考古資料から浙江地区で殷より春秋の時期に普遍的に流行するのは墓穴を掘らず、平地に土を積んで埋葬する土墩墓であることが判明している。

西周の中期以降、一部の土墩墓には石を積み上げた長条石室が見られるようになる⁽³⁾。

印山越王陵が採用した豎穴深坑及び墓道を帯びる形制と越地の伝統的土墩墓には明らかに質的な違いがあり、全く違った墓葬形制であると考えられる。

従来、考古資料からは戦国時代以降、越地の伝統的土墩墓はだんだんと豎穴土坑木椁墓にとって替わられるとされてきた。

しかし、今回の印山越王陵の発見は豎穴深坑墓の越地での正式の使用と流行の時期を春秋の晩期にまで引き上げた。そのことは越地の埋葬制度に春秋晩期の越の建国初期にすでに重大な変革があったことを表明している。

一部の春秋晩期の土墩墓の墓葬形制の中には坑を掘って埋めた可能性も認められるが、これらの坑を掘る形式と印山越王陵の豎穴深坑の形制とは根本的に違うもので同列には論じられず、越地の埋葬制度に変化が生じた原因を越文化自身の中に求めることは出来ない。

(2) 墓室と独木棺

印山越王陵の木製構造の墓室は両面に斜行する斜屋頂構造を採用し、平面は狭く長く、横断面は三角形を呈する。この種の特異な墓室形制は全国で初めて発見されたものである。

それと一般の木椁墓とを比較すると、形制と構造の上で違いがあるだけでは無く埋葬過程も全く違うことが反映されている。

一般の木椁墓では木椁が棺の外側を囲い、四面は直壁で封閉され、上面には平たい蓋板を置き、多くは箱式で墓門と甬道は無い。

その埋葬過程は上から木棺を吊り下げて先に木椁内に装入し、その後、蓋板を置き、再び充填土と封土を置く。

それに対して印山越王陵の断面三角形の細長い墓室は前に墓門があり、墓門の外には墓室と同じ形の木製の甬道を設ける。この種の墓室の形制と構造はその埋葬過程で、墓道、甬道、墓門を経て墓室に入り埋葬したことを明らかにしている。

発掘資料に対する総合的分析から王陵は墓室が出来た後、まず墓室の上に填土と封土を置き、墓道と甬道は残しておいて埋葬の際に出入りし、埋葬が終わった後、墓門を閉じ墓道を埋めてその後、甬道と墓道の上に封土を置き、最終的に封土堆（墳丘）を完成させたのである。

封土の縦断面からは2回の封築過程の跡が明瞭に観察される。印山越王陵と一般の木椁墓では埋葬形式と埋葬過程が明らかに違うことが見てとれる。

さらにこの種の断面三角形を呈する細長い墓室は西周、春秋時代に流行した石室土墩墓（墳丘墓）の断面が台形を呈する長条形の石室の形態に極めてよく似ている⁽⁴⁾。

まとめると、石室土墩墓は平地に埋葬した土墩墓の範疇に属し、印山越王陵は墓道を持った豎穴深坑封土墓で、両者は全く違った墓葬形態ではあるが、墓室の形態から言えば両者の相似性は明らかである⁽⁵⁾。

このことは印山越王陵の独特の墓室形制が事本的には越民族の伝統的形制に属していることを表しており更に独木棺の使用もまた越墓の特徴を具えている。

(3) 隍壕

隍壕は印山越王陵の重要な組成部分であり陵園の範囲の明確な標識を構成している。また、このような墓葬の周りに溝を掘り、防御・保護施設とするのは越の建国の前に流行した土墩墓には全く先例が無い。钱塘江以北の安吉県の古い町の周囲にある大型封土墓の中には印山と似た隍壕跡も存在するが正式の発掘を経ておらず、年代上で印山越王陵に先行するとは断定出来ない。

また、1982年、紹興坡獅子山麓で発掘された紹興306号越貴族墓では隍壕は発見されず、隍壕の設置は越国王陵あるいは王室墓が占有していたと考えられる。

これらのことから、印山越王陵の隍壕施設について、浙江省内に淵源があるか否かについては現在の所不明であり、今後の調査に期待したい。

浙江省外での印山越王陵に先行する隍壕の事例としては陝西省鳳翔県の先秦秦公大墓があげられる。秦都雍城の秦公陵园は考古工作者の多年にわたる探査によって、都城の南の三畴原ですでに14か所の陵园と49基の大墓が発見され、その中で最大の1号大墓はすでに発掘されている。

印山越王陵と同様にここでは陵园の四周に隍壕が廻らされており、印山のものより古い隍壕が確認できた。探査の結果、秦公陵园では陵园の四周に防御・保護に用いる隍壕が掘られるのは普遍的な現象であり、秦公陵园制度の重要な内容の一つであることが明らかになった。隍壕は一般には幅3.5～5m、深さ2.5～3.5mあり、隍壕の全体の分布形状はその多くが南北に向く長方形を呈する。

また、秦公大墓の墓葬形制は全て長方形の堅穴深坑であり、すべてに墓道がある。中でも陵园の中心の主墓には東西2本の墓道があり、墓坑は「中」字形を呈し、その他の陪葬墓あるいは附葬の王室の大墓には1条の墓道があり墓坑は「甲」字形を呈する。

(4) 結語

最後に報告書では、印山越王陵に見られる隍壕の設置の他、堅穴深坑、填築の風格の3つの外来の文化的要素は全て先秦秦公大墓の中に見出すことが出来、近隣の楚の文化の影響は基本的には排除され、中原文化の影響の可能性は完全に排除することは出来ないが（例えば墓坑と墓道）、それは先秦秦公陵园制度が南転した結果であり、越国はその建国の当初から王陵の埋葬制度の上で先秦秦公陵园制度の少なからざる要素を吸収接受していたと結論付けている。

その上で報告者は越王陵の埋葬制度と先秦秦公陵园制度の間に密接な関係があったことを基本的には肯定しつつも、両者の位置関係に言及して、中国の東南に偏居する越国の埋葬制度が何故に遠く離れた西北の関中地区にある先秦秦公陵园制度の影響を受けたのかについて、それを説明する十分な証拠と材料を持ち合わせてはいないとして、それ以上は言及していない。

報告書では、この他、被葬者の推定、盗掘の時期と盗掘者の推定などについても詳細に論じているが、紙数もほぼ尽きたのでこれらの点についてはまた機会を改めて紹介したいと考えている。

【注】

- (1) 浙江省文物考古研究所・紹興県文物保護管理局 2002年 『印山越王陵』 文物出版社
- (2) 小稿で使用した写真及び図は全て前掲書のもの転載したが、その際、表記を中国語から日本語に改変した。
- (3) 原文は「用塊石壘筑の長条石室」。
- (4) 原文は「然而、這種断面呈三角形的長条的墓室、与西周、春秋時期越地流行的石室土墩墓中断面呈梯子形的長条形石室的形態極為相似」。
- (5) 原文は「就整体而言、石室土墩墓属平地掩埋的土墩墓範疇、而印山越王陵則是帶墓道的堅穴深坑封土墓、是兩種完全不同的墓葬形制、但就墓室形態而言、兩者的相似性是顯而易見的」。